

## キタ 再発見の会



大阪キタのエリアは従来より交通やショッピングの拠点ということで「訪れる」まちの色合いが強いエリアですが、近年オフィスワーカーやお住まいの方、学生の方も増えており、「働く」、「住む」、「学ぶ」まちの色合いも徐々に濃くなっています。キタエリアで多くの時間を過ごされる方に、是非キタエリアの豊富な魅力を知っていただき、もっと好きになっていただくきっかけとして、この度連続講座「キタ再発見の会」を開催します。近年、まちの機能として職場や学校、自宅以外の「サードプレイス」が必要といわれております。「キタ再発見の会」はキタエリアのサードプレイスになることを目指しています。皆様に気軽に立ち寄っていただき、夜のひとときにゲストトークや意見交換を愉しんでいただければ幸いです。

### 第4回キタ再発見の会

□テーマ 『僕が中崎町でカフェを始めた理由』  
□講師 コモンカフェプロデューサー 山納 洋 様  
(大阪ガス(株)近畿圏部・都市魅力研究室長)  
□日時 2018年1月30日(火) 18:30-20:30  
□会場 都市活力研究所セミナールーム

大企業に勤める傍ら、自律的な活動として中崎町で2004年から“common cafe”を運営している山納洋さん。人と人が出会い、社会とつながっていく場としてのカフェを長く運営され、“Talkin' about”、“Walkin' about”などの活動によりまちとの関わりも探求されています。ご自身の活動を中心に、人がつながる場づくりの話、拠点である中崎町の話など、幅広く語っていただきました。

#### ■扇町ミュージアムスクエアがすべての始まり

今日は中崎町の話提供役として参りました。まずは私自身の経歴をお話しします。私は25年大阪ガスに勤めているのですが、そのうち14年は外部へ出向していました。最初は「神戸アートビレッジセンター」に、続いて「扇町ミュージアムスクエア(以下OMS)」に。OMSは1985年から2003年まであった施設です。ニューヨークにソーホーというエリアがあり、アーティストが倉庫など家賃の安いところに住んで創作活動をしたりお店を開いたりして話題になったエリアです。OMSができたころは、大阪にソーホーみたいな場所ができたという話題になりました。遊休不動産をパブルの時期にどう活用するかを検討する中、パブルの時期には大規模開発も検討されたようですが、1億円弱でリノベーションして活用という道を選びました。倉庫が小劇場に、食堂がギャラリーや映画館になったのです。そこに5年半いまして、閉館後メビック扇町に3年、その後大阪21世紀協会で御堂筋パレードなどの文化プロジェクトに携わっていました。14年間の文化、インキュベーションに関わる出向生活、特にOMSでは企業メセナ、企業の文化支援をやっていました。

2003年のOMSの閉館で、アーティストとの付き合いが無くなり、明日からはクリエイター育成の仕事でメビックでやってくださいということになったのですが、「そんな急カーブをよう曲がらんかった」というのが実情なのです。芝居や演劇の分野はもっとサポートが必要でなんとかしないとイケないと思い、OMS閉館の1年後に中崎町にカフェをつくりました。会社は辞めていないので副業と言えれば副業ですが、全く儲かっていないので趣味と言ったほうがいいのかもかもしれません。20坪ほどのスペースで、ふだんはカフェですがそこでライブ、演劇の公演、映像の上映、ギャラリーなど、OMSでやっていたことを、コツコツと家賃を払ってスタートしました。それから14年間、コモンカフェを維持し続けています。今日のテーマは中崎町なので、前半は中崎町の話、後半は場づくりの話、つまりそもそも店をやるとは何なのか、飲食業がしたいのか、いろんな人が会おう場、想いを開花させる場をつくりたいのか、そんな話をします。

#### ■中崎町のはじまり

14年前に中崎町で店を開きましたが、現在とはかなり状況が違っていました。中崎町にお店が増えているのはご存知だと思いますが、お店をやる側の人たちは何を考えているのか?地面を持っている建物を持っている人はどうなのか?地元の人はどう考えているのか?そんな話をします。美談だけでは済まない話です。

2006年に情報誌「大阪人」が中崎町を特集しました。1999年ぐらいからお店が集積しはじめたのですが、最初は「楽の虫」「オルフェ」「ひょうたんや」などが出店しています。3~5坪、家賃数万円のお店がポツポツ出てきたわけです。地図を2種類用意しました。一つは昭和41年当時のもの、もうひとつは最新の平成29年版のものです。それ

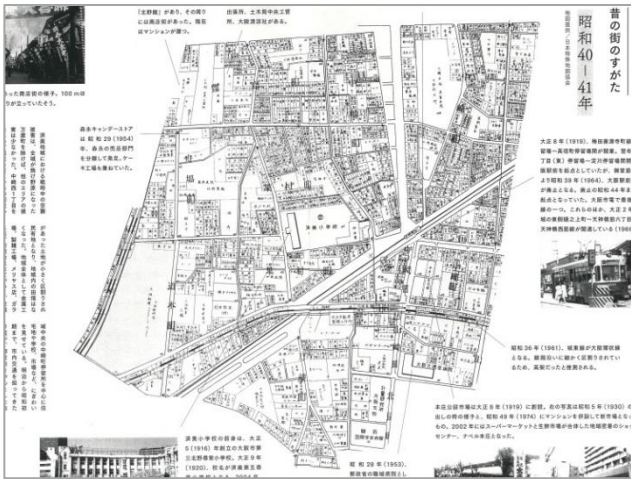
を見比べながら話をしていきます。都島通りの主に北側で中崎町交差点より主に西側のエリアを中崎町と呼んでいます。そのエリアには小さな家がたくさんあります。古い地図には済美小学校がありました。そこはマンションとコミュニティ広場になっています。そのことがこのまちの一番大きな変化なのです。つまり、密集した住宅があってそこに住む人たちのコミュニティが小学校を中心にありましたが、それがマンションとコミュニティ広場になったのです。ここに住んでいる人たちは天五中崎商店街というアーケードのある商店街で日常品の買い物をしていました。履物屋、洋品店、帽子屋、化粧品屋など、生活に必要なお店がそろっていたのです。不思議なのはお店のあとに新しいお店ができたのではなく、住宅地のほうに新しいお店ができたのです。いま100店舗ぐらい新しいお店ができていますが、住宅街から商店街へも広がっています。商店街の北側の浮田1丁目にも古い長屋があり、そちらにも出店しています。若い人はふつうの商店街にお店を出したかったのではなく、自分の得意な料理を出す、好きなものを並べるといったいわば「自分の城」がほしかったのです。つまり中崎町への若い人たちの入植は小さな物件を使って始まったわけです。そして2006年ごろにあった多くのお店は現在ほとんど入れ替わっています。

戦前の大阪は長屋だらけで、借家率8~9割であり、長屋暮らしのまちでした。その中で中崎町は戦災に遭わなかったので長屋が残りました。1990年代に空き家が増加し、そこに若い人たちが進出しました。初期の人たちは3~5万の家賃で借りていました。仲介屋を通さずオーナーと直接交渉した人も多かったようです。都市のスプロール現象とは無秩序に農地に住宅が広がっていくことを指しますが、中崎町は戦前のスプロールエリアです。接道条件を満たしていない建物が多く、タイル張りなど燃えない工夫がされたりしています。マンションの1階でフランス料理をやっているお店もありました。必ずしも古民家だけではないのです。細い路地に面してお店が集積しており、建て替えた建物はセットバックして道路幅を確保しています。また2階建ての長屋物件もある。有名な「サロン・ド・天人」は元倉庫の建物です。2001年にパフォーマーのJUNさんが延べ千数百人の手を借りてほとんどお金をかけずにセルフビルドしたのが天人です。その後セルフビルドという手法が増えています。さらには新築のお店も混ざってきています。大阪駅から徒歩10~15分の場所で、家賃数万円で、もう一つの生き方ができる。自分が好きなものをお店に並べて売る、儲からなくても食べていければいい。そんな若者が中崎町に集まってきたわけです。

#### ■中崎町の魅力

中崎町は梅田から10分の都心にレトロな雰囲気のみちなみが残る場所です。2000年ごろからリノベーション、セルフビルドによって、カフェとか雑貨屋、洋服屋、ギャラリー、美容室などが軒を連ねるようになりました。ビジネスよりも自己表現でお店を出す人が多いのですが、





昭和41年の中崎町 \*出典：大阪人

それは家賃が比較的安く小資本開業が容易なまちなのです。雑誌、新聞、テレビなどメディアで中崎町がどんどん取り上げられ、中崎町巡りがブームになりました。長屋のまちとしては最初は空堀、中崎町、次に野田、福島、その次は昭和町、阪南町、蒲生4丁目などへと広がっています。

私が中崎町を選んだのは、まずは大阪駅からの距離がOMSと同じくらいなので、それであればOMSと同じようなことが実現できるかもとの思いからです。はずれ梅田に自己実現の場所の可能性があるのではないかと。また都心なので実験的なことが受け入れられやすい環境にあるとも考えました。若い人が尖ったイベントをやってもそれを受け止めてくれる人が何十人かは居て成立するのではないかと。さらに、お店の集積があるので、ピフォーシアター、アフターシアターにも困らない。そして小さいお店はいろいろ制約があるので、そこそこの規模にすればみんなのためのスペースにもなるのではとも考えました。

#### ■中崎町の商売の実際

せまい住宅地に何十店舗もあり、お客さんを分け合っている状況であり、日常の営業だけでは経営は厳しく、週末の中崎町巡りのお客さんで持っているのが実情だろうと思います。また住宅街の奥に入った場所では商売はさらに難しくなります。騒音、自転車、ゴミなどで近所に気を使いますし、老朽化した木造建物には火災、震災のリスクもあります。お店が増えて過当競争気味であり、多くのお店は入れ替わっています。調べてみましたが、2004年のマップに出ているお店で現在も続いているのは1店舗だけでした。2000年ごろ出店したお店のことは話題になりメディアにも取り上げられたので知っていますが、その後のお店のことは中崎町でカフェをやっている私ですら知らないのが実情です。さらに高齢化した住民とショップオーナーの意識にはずれがあるのも事実です。外国人観光客も増えました。特に韓国人観光客が多いようです。

#### ■店主の視点から見た中崎町

低家賃で一人でできる商売は開業のハードルが低いです。商売がうまく回るようになると手狭になり、中崎町を出ていくか中崎町に拠点置きながら他地区にも出店するようになります。船場や堀江に進出したお店もありますし、「太陽の塔」のように梅田や難波に出店したところもあります。そして、複数の店舗を経営するようになると客も変わってきます。1店舗目はオーナーに会うことを目的にお店に行きます。2店舗目は愛される店主をつくる必要あり、3店舗以上となると人ではなくコンテンツや空間の方向へ目的が変わってくるのです。

中崎町のリブランディングが必要ではないでしょうか。今どんな人がどんな思いで中崎町でお店をやっているのか？いつまで続けたいと思っているのか？知らない間に居なくなった人はどんな人で、今どこで何をしているのか？などをキッチリ整理する必要があると思います。以上が今の中崎町について思うところです。

中崎町に店を出したい人は多いが市場性などは考えていないように感じます。住宅地でない幹線道路沿いにもお店があります。太陽の塔は最初は住宅街の中にもありましたが、近隣問題から幹線道路沿いに移転し、そこを拠点に梅田や難波へ出店しました。レトロな住宅街の横に高層マンションができ、木造賃貸住宅だったところがホテルに変わり、徐々に開発の波がレトロ街にも及んでいるのが現状です。木造住宅の住民の

失火による火災でお店に延焼する事件が数日前にありました。

#### ■コモンカフェは実験劇場

コモンカフェは長屋ではないところでこっそりやっています。まちづくりはやっていません。「まちづくり」には覚悟があると思っています。コモンカフェはビルの地下1階にあるのですが、地下に下りる階段に、コモンカフェは店主が日替わりであること、自分がやりたいことを試すためのお店であることを私的に書いてある黒板があり、それをくぐってお店に入るつくりになっています。それもあってお客さんからのクレームは受けたことがありません。それをわかって入ってくださいねと言っているのです。1階にお店を出すには覚悟があると思っています。地下のコモンカフェはやりたいことができるスペースとしてつくったので、少しまちから距離を置いています。つまり自分たちの実験ができる、自信がつけばまちに出る、そのクッションとして、実験劇場としてつくりました。

#### ■場について

「つながるカフェ」という本を書きました。公共的な空間とは何かについて述べています。カフェをやりたい人は、飲食店をやりたい人と場づくりをやりたい人とがいますが、後者が増えてきています。いろいろな人の自己実現の場をつくりたい、いわゆる「サードプレイス」、第3のリラックスできる場所を目指しています。コミュニティカフェは人のつながりをつくる場所と定義されていて、それによって補助制度もできましたが、補助金をもらっていてもコミュニティカフェとは呼べないカフェ、補助をもらっていないけれどコミュニティを志向しているカフェが混在しています。人が出会うときの機微を知るべきで、カフェをついたら人が出会うという単純なことではないのです。紹介、話題提供、環境を整えることなどが重要です。イマイチの場になれば人が集まらなくなり、仕事が回るようになって場には来なくなるのです。そして僕は、場所について、成長するための場所、他者とつながるための場所、創発を生み出すための場所と分けて考えるようにしています。

成長するための場所、思いついたからこんなことやってみようということが出来る場所も必要ですし、覚悟をもって公共性を担う場も必要だと思います。



現在（平成29年）の中崎町 \*出典：済美・北天満連合振興町会区域図

【司会】 山納さん、ありがとうございました。中崎町について、今日の話だけで雑誌の特集記事が書けるぐらいの内容であったと思います。カフェをやる場所として中崎町を選んだ理由はよくわかったのですが、そもそも自らカフェをやろうと思ったのはなぜなのでしょう？

【山納】 私にとってはOMSでの経験がすべてです。年間150本の演劇を見て、面白い人をOMSに呼びました。演劇の人に恩があり、閉鎖→転勤の急カーブを曲がれず、OMSを継続するためにカフェを考えたのです。いろいろな人たちのいろいろな活動を支える、劇場としてのカフェです。そしてメビック扇町という起業家支援施設で働いたことで、自分自身も起業するという選択が、より身近なものになったのだと思います。